



随 想

桑 杖 紛 失

加 藤 茂 生

文化財のチャペルに桑の杖はなし

——ある日ある新聞のニュース川柳に、ふと、こんな一句を見付けたことがあった。チャペルが重要文化財に指定された当時だったが、はじめは何の気なしに読み捨ててはいたものの、よく考えてみると、背すじの寒い思

いをした。

✕

ボクの父、加藤勇次郎は、いわゆる熊本バンドの一員として、第一回卒業。キャプテン・ジェンスに連れられて、牧師になるため渡米してアーモスト、オベリンに学んだらしい。だが、エレキテルの虜となり、スカラシップをキャンセルされて、ボストン工業大学に学び、日本で最初の電気技師の一人となった。その後、京都のチンチン電車、蹴上の水力発電所、インクラインの技師長をしたり、同志社の初代校友会長になったりしている。

米国でクリスチャンを廃業する時、まず新島先生に御相談申しあげたところ、

「電気道の進みなさい。あなたを神の道に結ばなかったのは、すべてこの新島襲の責任ですから、神様には私からも深くお詫びしておきます」

という御返事を戴いて、勇氣百倍したと、よく語ってくれた。

徳富蘇峰翁も、御自身の「脱藩」と併せて、このことを語られ、新島先生の大らかな愛と底の知れぬ肚の太さを讃えられていたものである。

✕

桑の杖とは、こうした教育愛であり、責任感であり、あの折れた桑の杖に代表される新島襲精神そのものであらねばならない。

その桑の杖のない同志社……と考えてくると、一片の川柳の何という痛烈な諷刺、何という強烈な批判であることか。いくらチャペルが文化財に選ばれようと、いくら新校舎がケンを競って建ちならばうと、新島精神を失った同志社は「残骸」にしかすぎなくなる。

✕

滋賀県で唯一の日刊紙「滋賀新聞」が行き悩んで、現在の「滋賀日日新聞」に生れ変わるまでにボクも参画したことがあるが、歴代の社長が奥村悦三（現・滋賀県副知事）北村謹一（元・産経新聞企画局長）の両君であり、現在も同志社に学んだことのある木村興人社長である。ボクも混えて、四代の代表取締役が同志社関係ばかりなのも珍らしいだろう。

この北村、木村、奥村、ボクらの学生時代……つまり大正の終りから昭和の初期にかけて唄われた応援歌「不断の楽」には、「懂がれつどう三千の学徒の胸に……」という一節があった。それも女学部から今出川幼稚園ま

で含めて、なおサバをよんだ数字である。それが今では軽く二万を越える「学都」にふくれ上っている。同志社の発展はうれしいが、同志社精神が水まじされたり、雲散霧消に近いのではよろしくない。

吉田茂は「曲学阿世」で物議をかもししたが、「曲阿・学生」の切り売り無責任教師ばかりでは、むしろ「新島襄精神」に逆行するものだ、と決めておけば、少しは同志社人ども眼がさめるであろうか。

(京都新聞取締役)

旅

高田 峯 尾

数年前までは旅を思いたったら、ふところ工合さえよかったら何時でもどこにでも行けたものだ。気のむくままに汽車にのり、下りたい所で下りればいい、宿につけばまづゆっくりと湯にはいって、さて膳にむかい、女中に土地の話でもききながら食事をする。レジャーとか何とかいっていた頃はまあどうと

かったが、バカンスというフランス語の片言がはいって来たらサッパリになった。駅に行けば当然切符が買えると思っていた時代はいまいづこである。二週間前の明方からでもならばないとまづ望みはない。山奥だからとたかをくくって宿屋にとびこむと、お室はごいませんとにべもない。食事だけどうにかならないですかと哀願すると、もう時間外ですとつばねられる。ドンブリでもいいんですがといつても、ごいませんである。お気の毒さまともいわない。だがこれはユースホステルを渡りあるいている若人たちには関係のない事である。

特急電車と云うようなものができてから旅はより興なきものとなった。窓があかない。たとえ開いたにしろ停車時間がすごく短い。駅にとまる毎に名物の一つづつ買いこんでいた悠長な旅はもう昔のことになった。

買物といえど温泉町のおみやげ品もひどくつまらないものになってきたと思う。たとえば草津のような山の温泉町では、木をくりぬいてつくった品とか、お盆とか、安くて素朴な山の匂いのするものを売っていたものだ。ねづみ色にあかい石楠花をそめた手拭い

などもうれしいものの一つだった。今ではどこにでもある様なこけしとか毒々しい色でヌードの女をそめたタオルがならべてある。

もつとも土産物が安っぽく貧弱になったのは日本だけではないかもしれない。二年前の夏久方ぶりでオックスフォードの土をふんだ時、あれこれと心にもめていた土産物が全く姿を消してしまっていたのにはがっかりした。店に並んでいるのはいやに薄べらなピカピカの灰皿やすぐ曲ってしまいそうなペーパーナイフである。大学の紋章入りの手ざわりのどつしりした本立てとか書類入れなどは足をすりこ木にしてさがしまわっても見つからなかった。ストラットフォードに至っては、日本ならさしづめ沙翁羊かんとか、ハムレットまんじゅうというような事になるのだろうが、いかにも安っぽいペナントや灰皿のようなスーブニールがならべたてられ、俗悪の総元締のようだったブライトンをはるかに上廻る感じがあった。

旅行というものは昔は時間と金の余裕のあるものがおもに企てたらしい。今では大衆化されて来、従ってみやげ物というようなものもまた大衆化されたのだろう。別に苦情をい

う筋もない事なのだろうが、私たち年配のものに取っては、いさゝか淋しいということはある。若い人たちにわかって貰えるであらうか。

(女子大教授・英文学)

白人少女の告白

大下 尚 一

シカゴの北郊には、上層中産階級の美しい住宅地が続いている。その一つのウィネチカの教会が、正月をどうしようかと思っていたわたしを、中学生のキャンプに來ないかと誘ってくれた。少年たちと数日生活すれば、アメリカの家庭教育を知る機会になるだろうという期待もあって、喜んで招待に応じた。わたしは、中産階級の家が想像したよりはずっと健全らしいことに関心をもっていた。

シカゴの北約七十マイル、ウィスコンシン州の南部にあるジュネーブ湖畔のキャンプサイトは、雪におおわれた自然と暖房完備のキャンピングがあり少年たちと合宿するのに最適であった。雪合戦やそり乗り、二時間の夜道

行進など愉快な数日であった。みそかの夜は十一時からダンスパーティー、年があげると一両手をつないで黙禱、そしてハッピー・ニュー・イヤーをかわしつゝ自分のキャンピングに帰った。簇のよい少年たちで、いつも外国人の客に氣をくばってくれた。

キャンプの目的は合宿による教育で、主題は「マチュリティー(maturity)」―成熟、完成という訳では感じがでない。「人間として立派なおとなになるには」といった意図があるのだが、中学生には程度が高すぎる課題である。しかし、よく計画がねられていて、うまく生徒に自分で考えさせるリーダーと、活発にディスカッションをする中学生をみて、やはりアメリカ人だと感心した。三日目の午後、グループにわかれて「マチュリティー」をあらわす代表的人物を話しあった。リンカーン、チャーチルからだれか君のお父さんまで、たくさんでできた。日本人ではどんな人があるかという質問に、わたしは困まらされた。一時間後、わたしのグループは黒人歌手マリアン・アンダーソン女史を代表的人物に選んだ。今度は各グループが選んだ人物からキャンプの全員が投票で一位をきめるのであ

る。結果は、アンダーソン女史が過半数の支持をえて、わたしのグループは夕食のあとかたづけを免じてもらった。コンテストがすすきで、どこでも人気が大切なアメリカ人であるが、「マチュリティー」の代表的人物の人気投票には、いさゝかおそれいった。しかも少年たちがアンダーソン女史を選んだのはどういうわけか。わたしは感心してしも、わりきれぬものを感じた。

その夜、明日帰るというので反省会があった。そこでちょっとしたことが起った。一人の女生徒がたちあがって、何か言おうとするのだが、ことばにならない。やっと彼女は、自分の母親がどんなによい人かを説明しはじめたが、急に泣きだしてしまった。生徒たちは緊張と当惑で沈黙していた。一人が「元氣をだして続けろ」と叫んだ。彼女が再びたちあがって告白したことは、自分の住んでいたアパートに黒人が越してくるようになったとき、母親がどんなにあわてたかということであった。そして自分に愛の大切さと人種差別のわるいことを教えてくれたのは、お母さんでしたといつて座った。一同はまた沈黙した。

あの冬からもう六年、彼女もマチュアな女

子大学生になっていることだろう。その後南部の黒人差別問題は、全アメリカの課題となり、この八月二十八日には「今こそ自由を」のスローガンをかゝげて二十万人の行進がワシントンでおこなわれた。アンダーソン女史も二十万人の一人だったと聞く。黒人問題が話題になるとき、このキャンプの思いでがいっつもわたしの頭をかすめるのである。

(文学部講師・英書講義)

おりふしのこと

高 島 春 江

沙羅の花

沙羅の花いまだ芽ぶかず広庭の苔
夕かげに沈みて青し

Kさんが中学を出てもう十年になるだろうか。大学の経済学部を終え、今は実業界にいるが、名を言えば先生方、友人達、必ず「あゝあれか」と思わずにつこりされるであらう。その彼の母上の一周忌が大徳寺の魚翔院で営まれたのは、さる四月であった。

仏事が終わっても、母上の人柄を偲んで立ち去り難く、茶室で彼の親友の藪内若宗匠のお茶をいただき、その上、ついに水屋に坐りこんで話し続けた。そのあと連れ立って真珠庵を訪れたのであるが、彼はかつて学んだ平家物語を思い出して、庭にある沙羅を指して教えてくれた。私はまだ沙羅の花を知らない。六月の雨の頃、白く咲いては、すぐ散るというその花を、必ず見に来ようと思った。

思いつつ訪れかねている七月のある日、新間に比叡山の御廟の沙羅がまつ白く咲きさかっていると書いてある。すぐにも、と思いたがそれもなく、八月中旬に卒業生と登ったのを幸い、私は彼らから離れて一人御廟に詣でた。もちろん沙羅の花を見るよしもなかったが、あたりの静寂に、私は心の澄みゆくのを覚えた。

沙羅の花すでに過ぎけり山上の御廟
寂けくひぐらしの鳴く

葛 切り

くれなるの函に納まる鎌善の葛切り
白く透りて涼し

映画「女の坂」に出てくる鎌善の葛切りを

娘に勧められてから久しくなるが、この六月のある日、仕事に疲れての帰るさ、ふと、雨の中を鎌善に向った。

二階の一室には、かすかに香が漂っていて人影がない。床の鉄仙の紫が濃かった。

暫くしてお茶と美しいお菓子をお勧められ、なお、久しく待って、紅の函が前に据えられた。見馴れぬ函にとまどいながら、まず、そのふたを前へはずすと、中に濃緑の塗りの器が納っている。それが、蓋と中と下にわかれ、内側は黒塗りであった。

下の器に氷が浮き。長い、薄い葛切りが、ほのかに白く沈んでいる。食べるに惜しい美しさである。しかし、中の器の蜜で食べるとそれは、なお本当に美味しかった。

雨のせいとか他に客はない。静かなるまま、場所柄も忘れて思いに耽っていると「旅のお方ですか」と、いつの間に傍へ来たか、娘さんが新しいお茶を入れながら、優しく問いかける。私は旅人と呼ばれて楽しかった。

(中学教諭、国語)